

国際仏教学大学院大学研究紀要
第 23 号 (平成 31 年)

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XXIII, 2019

『宝性論』の tathāgatagarbha (如来蔵) 解釈考

斎 藤 明

『宝性論』の tathāgatagarbha (如来蔵) 解釈考

斎藤 明

はじめに

周知のように、如来蔵・仏性説は大乗仏教を代表する仏教思想の 1 つである。如来蔵思想研究については、およそ半世紀にわたり、J. Takasaki [1966] による『宝性論』の英訳注研究、ならびに高崎直道『如来蔵思想の形成』[1974] とその関連業績が内外の研究を主導してきた。この間、高崎自身による研究の進展とともに、中村瑞隆 [1961]、D. Seyfort Ruegg [1969]、L. Schmithausen [1971] による関連研究、原実の garbha 研究 [1987] [1994]、下田正弘による『大乘涅槃経』の研究 [1991] [1997] と『如来蔵と仏性』(シリーズ大乘仏教 8) [2014] の編纂を通じた如来蔵・仏性思想研究の総括的諸論考、M. Zimmermann [2000] [2002] [2014] による『如来蔵経』に関する一連の研究、加納和雄 [2014] [2017] による『宝性論』のインドからチベットへの伝承に関する研究が目される。また、松本史朗 [1986] [1989] [1994]、袴谷憲昭 [1990] 他による如来蔵・仏性思想—さらにはこれに関連する本覚思想—に対する一連の批判的研究も記憶に新しい。近年はまた、M. Radich [2015] や Chr. Jones [2016] [2018] による最新の成果も注目される。

しかし、tathāgatagarbha (如来蔵) をめぐっては、残念ながら、今なおその語意解釈に定説が得られていない。いずれも garbha の意味理解とともに tathāgata-garbha という合成語の解釈が関係する。いずれにせよ、先入見を排し、この合成語が登場する文献に即し、文脈をふまえながら、また garbha 合成語の一部にふくむ広い用例を勘案しつつ、あらためての

議論が求められていよう。

以上のような研究史と課題を念頭に置きながら、本稿は、『如来蔵経』に対する広義の注釈文献ともいえる『宝性論』の文脈に立ちかえり、当該術語の意味を再考したい。同論は「如来蔵」(tathāgata-garbha)の合成語解釈を示す貴重な論書である。「すべての有情は如来蔵である。」と宣言したのは『如来蔵経』であるが、同経はこの合成語そのものを分析的に解説することはなく、9つの譬喩をもって宣言の意図を説明する。これに対して、『宝性論』はこの「すべての有情は如来蔵である。」という一文の解釈を中心に、三宝出現の原因としての如来蔵を直接のテーマとして詳論する。すなわち、この一文内の「如来蔵」の語を(1)法身、(2)真如、(3)種姓の3つの観点から捉え、この合成語に対して格限定複合語 [(1)] と所有複合語 [(2) (3)] の解釈を提示し、詳説する。

以下では、tathāgatagarbha (如来蔵)を3つの観点から総括的および各論的に解説する『宝性論』の関連する2箇所の内容を訳出した上で、分析を加えたい。

I 有垢真如 (samalā tathatā) としての如来蔵 (tathāgatagarbha)

「ここで、有垢真如に関して、「すべての有情は如来蔵(如来の胎児)である」と『如来蔵経』に」説かれているのは、いかなる意味によるのか。

[本頌 5] 「(1) 有情の類は仏智に内在しているから¹、(2) そ [の有情の類] が無垢であることは本来的に不二であるから、(3) 仏の種姓を指して、その [仏種姓の] 果報 [すなわち、仏=如来] の比喩的表現であることから (upacārāt)、すべての生き物 (有身者=有情) は仏の胎児 (buddhagarbha) である、と説かれた。」(27)

¹ See Takasaki [1966: 197, n. 4].

[この本頌によって何が示されているのか。]

「(1) 正覚者の身体 (= 法身) が遍満するから、(2) 真如が無差別であるから、また (3) 種姓 [があること] から、常にすべての生き物 (有身者 = 有情) は仏の胎児 (buddhagarbha) である。」(28)

要約すると、3種の意味で、常に「すべての有情は如来蔵 (如来の胎児) である。」と世尊は説かれたのである。すなわち、

- (1) すべての有情に如来の法身 (tathāgata-dharmakāya) が遍満しているという意味で、
 - (2) 如来の真如 (tathāgata-tathatā) が無差別であるという意味で、および
 - (3) 如来の種姓 (tathāgata-gotra) が実在するという意味で、
- である。さらに、これら3種の意味の句についての解説は、のちに『如来蔵経』にしたがってなすであろう。」

(atra samalāṃ tathatām adhiḥkṛtya yad uktaṃ sarvasattvās tathāgata-garbhā iti tat kenārthena/

buddhajñānāntargamāt sattvarāśes
tannairmalyasyādvayatvāt prakṛtyā/
bauddhe gotre tatphalasyopacārād
uktaḥ sarve dehino buddhagarbhāḥ// (27)

saṃbuddhakāyaspharaṇāt tathatāvvyatibhedataḥ/
gotrataś ca sadā sarve buddhagarbhāḥ śarīriṇaḥ// (28)

samāsatas trividhenārthena sadā sarvasattvās tathāgatagarbhā ity
uktaṃ bhagavatā/ yad uta sarvasattveṣu tathāgata-kāyapari-spharaṇārthe-
na tathāgatataḥtathatāvvyatibhedārthena tathāgatagotra-saṃbhavārthena ca/
eṣāṃ punas trayāṇām arthapadānām uttaratra tathāgatagarbhasūtrānu-
sāreṇa nirdeśo bhaviṣyati/) (RGV, pp. 25.18-26.10)²

II 如来蔵の三種の本質：法身 (dharmakāya)、真如 (tathatā)、種姓 (gotra)

「以上のように、貪り等の9つの垢 (mala) は [色あせた] 蓮華などに等しく、[如来の] 本性 (dhātu) は、3つの本質を包摂することから、[蓮華中の] 仏などと類似性をもつ (sādharmya)。」(143)

3種の本質 (svabhāva) に関して、心の浄化の原因である如来蔵が、仏の像 (buddhabimba) 等と、9通りに類似性をもつことを理解すべきである。3種の本質とは何か。

「その(如来の)本質は法身、真如、種姓でもあると [理解すべきである]。それ(本質)は [それぞれ、蓮華中の仏、衆蜂と蜂蜜、穀皮中の実という第1から第3までの] 3つ、[汚物中に落ちた金塊という第4の] 1つ、および [貧家地中の宝蔵、果実皮の中の種子、弊衣中の宝像、貧女胎中の王子、泥模中の金像という第5から第9までの] 5つの喩例によって知るべきである。」(144)

3つの、すなわち仏の像、蜂蜜、実の喩によって、その [如来の] 本性は法身を本質とすると理解すべきである。1つの、すなわち金の喩によって真如を本質とすると [理解すべきである]。5つの、すなわち [宝] 蔵と、[果皮内の種子から生じる果] 樹と、宝像と、転輪王と、金像の喩によって [自性身、受用身、変化身という] 3種の仏身を生じる種姓を本質とする、と [理解すべきである]。

(1) その中で、法身とは何か。

「法身は2種類と知るべきである。よく垢をはなれた法界と、それと同質 ([法界] 等流) の、深遠な、あるいは種々の方法による教説であ

² 以下、『宝性論』*Ratnagotravibhāga* (RGV) のテキストは Johnston [1950] による。網掛け部分は訂正箇所。Takasaki [1966: 398], Schmithausen [1971: 156-157], 高崎 [1989: 322-330] 参照。アンダーラインは筆者によるもので、「如来蔵」(tathāgatagarbha) の三種の合成語解釈を示す箇所。

る。」(145)

諸仏の法身は2種類として理解すべきである。[第1は、] きわめて清浄な法界で、無分別智の活動対象である。それはまた、諸々の如来がそれぞれに証得した法 (adhigamadharma) に関して知られるべきである。

[第2は、] それを獲得する原因で、きわめて清浄な法界と同質 (等流) の、教化される者 (所化) に応じた、他の有情たちに知らせるために生まれるものである。それはまた、教説の法 (deśanādharma) に関して知られるべきである。

さらにまた、その教説 [の法] は微細な [法の設定方法] と粗大な法の設定方法との区別により、2種類である。すなわち、深遠な菩薩蔵 (bodhisattvapitaka) の法の設定方法による教説で、勝義真理に関してあるものと、種々の契経、重頌、記別、偈 (伽陀)、自説、因縁等の種々の法の設定方法による教説で、世俗真理に関してあるものとである。

「出世間のものであり、その喩例は世間では得られないので、[清浄法] 界は如来とのみ類似性が示される。」(146)

「微細で深遠な方法による教説は、蜂蜜が一味であるようなもので、種々の方法による教説は、さまざまな穀物の実のようなものと知るべきである。」(147)

というように、これら3つの、仏の像、蜂蜜、実という比喻によって、如来の法身が有情界 (sattvadhātu) に余すところなく遍満しているという意味に関して、「これらすべての有情は、如来の胎児である。」(tathāgatasyeme garbhāḥ sarvasattvā itī) と [『如来蔵経』で] 説示されたのである。なぜなら虚空界の [外に] 物体 (色) [が存在しない] ように、有情界のいかなる有情も、如来の法身の外には存在しないのであるから。じつに、以下のように説かれている。

「あたかも虚空は常に遍在すると認められるように、それと同じように、それ (仏性 buddhatva) は常に遍在すると認められる。あたかも虚空が形あるものに遍くゆきわたるように、それと同じように、それは有情の群れに遍くゆきわたっている、と。」(MSA 9.15)

(2) 真如

「本性 (prakṛti) は変化せず、善妙であり、清浄であることにより、真如に対して、金塊の喩えが説かれる。」(148)

心は、限りない煩惱と苦悩の法につき従われているが、本性的に光り輝いているために、変化を蒙ることはない。それゆえ、善妙な金のように、無変異性 (ananyathābhāva) の意味で、「真如」といわれる。そしてそれ(真如)はまた、邪定聚の個体連続(相続)をもつ有情たちにとって、本来的に区別されていないが、すべての偶来的な垢の浄化に到達したとき、「如来」という名称を得る。このようにして、1つの、金の喩例によって、真如が無差別であるという意味に関して、「これらすべての有情は、如来の真如³を血筋⁴ [=胎から胎児に継承される本質]としている。」(tathāgatatahataiṣāṃ garbhaḥ sarvasattvānām iti) と『如来蔵経』で説示されたのである。

心の本性清浄にして(=無垢であり cf. k. 27 [=本偈 5]) 不二を性質とすることに於いて世尊は次のように説かれている。

「そこにおいてマンジュシュリーよ、如来は我の執着(我取)の根元を遍知している。自らが清浄であることによって、すべての有情の清浄であることを理解する。自らが清浄であることと、[すべての = Tib.] 有情が清浄であること、これは不二であり、2つに分けられない。」(Jñānālokāṃkāra, pp. 64-65) と。

同様に於いて、じつに『大乘莊嚴經論』の著者は] 次のように言う。

「真如はすべてにとって区別されていないが、清浄さに到達したときに、如来たるものである。それゆえにまた、すべての生き物(有身者 = 有情)は、それ(如来)の胎児である(=清浄さに到達したときには

³ tathāgatatahataiṣāṃ em., cf. Tib: de bzhin gshegs pa'i de bzhin nyid; tathāgatatahataiṣāṃ Johnston, Ms. B(37a4). See RGV. 26.8 (ad v. 27): tathāgatatahataiṣāṃ vyatibhedārthena 「如来の真如が無差別であるという意味で」。

⁴ 原 [1987: 807] 参照。なお、これに関連して同 [1987: 808-810], Hara [1994: 52-55] は、deva-garbha (「神の胤」「神の子」「神の胎児」) の用例と tathāgata-garbha との近似性を指摘する。

「如来」といわれ、本来的に区別されていない真如を血筋 (lineage) とする。)(『大乘莊嚴經論』MSA 9.37)

(3) 如来の種姓

「種姓、それは2種類で、[それぞれ宝] 蔵、果樹のようであると知るべきである。無始の本性としてある (anādi prakṛtiṣṭha) [種姓] と、のちに獲得された (samudānīta) [種姓] とである。」(149)

「[自性身、受用身、変化身という] 3種の仏身の獲得は、この2つの種姓によると考えられる。第1 [の本性住の種姓] から第1の [自性] 身が、一方また、第2 [の獲得された種姓] から、後の [受用身と変化身の] 2つがある。」(150)

「清浄な自性身は宝像のようであると知るべきである。作られないものであり、本性は功德の宝の拠り所であるから。」(151)

「大法王であるから、受用 [身] は転輪王のようであると [知るべきであり]、変化 [身] は、映像を本質とするのであるから、金像のようであると [知るべきである]。』(152)

以上のように、これら残りの5つ、すなわち [宝] 蔵と、[果皮内の種子から生じる果] 樹と、宝像と、転輪王と、金像の喩例によって [自性身、受用身、変化身という] 3種の仏身を生じる種姓が実在するという意味に関して、「これらすべての有情は、如来の本性を血筋 [= 胎から胎児に継承される本質] としている。」(tathāgatadhātur eṣāṃ garbhaḥ sarvasattvānām iti) と [『如来蔵經』で] 説示されたのである。

じつに、如来であることは、3種の仏身をもって顕わされる。それゆえ、「如来の本性」とは、そ [の3種の仏身] の獲得のための原因 [という意味] である。このばあい、「本性」(dhātu) の意味は、原因 (hetu) という意味である。なぜなら、次のように説かれるから。

「[貧女が転輪王を懐胎する喩例の中で、] そのばあい、それぞれの有情には、[貧女の] 子宮 (胎) の中にある (garbhagata) 如来の本性が生じている。しかし、かれら有情たちは知らない。」(『如来蔵經』⁵⁾)

同様に、また説く。

「無始時來の本性 (anādikāliko dhātuḥ) は、一切法の拠り所である。それがあるとき一切の〔輪廻の〕趣くところ (gati) があり、また涅槃の証得もある。」(『大乘阿毘達磨經』)

この中で、「無始時來」(anādikālika) とはどうしてか。すなわち、ほかならぬ如来の血筋 (如来蔵) に関して、世尊は「前際は知られない」と説かれ、示されているということを用いる。

「本性」(dhātu) について、『勝鬘經』は「世尊よ、この如来の血筋 (如来蔵) とは出世間の血筋であり、本来的に清浄な血筋である」と説く。

「一切法の拠り所」(sarvadharmasamāśraya) について、『勝鬘經』は「それゆえ、世尊よ、如来の血筋 (如来蔵) は、[それと] 結合し、不可分で、智と離れず、無為である諸法にとって、所依 (nīśraya) であり、支え (ādhāra) であり、基盤 (pratiṣṭhā) である。世尊よ、如来の血筋 (如来蔵) は、[それと] 結合せず、分離した、智と離れた、有為である諸法にとっても、所依であり、支えであり、基盤である。」と説く。

「それがあるとき、一切の〔輪廻の〕趣くところがある」(tasmin sati gatiḥ sarvā) ということについて、『勝鬘經』は「世尊よ、如来の血筋 (如来蔵) があるとき輪廻がある、という考えは、この〔如来蔵の〕語のためにあります。」と説く。

「また涅槃の証得もある」(nirvāṇādhiḡamo 'pi ca) ということについて、『勝鬘經』は「世尊よ、もしも如来の血筋 (如来蔵) が存在しないなら、苦を厭うこともなく、また涅槃を望むことも、求めることも、願うこともないでしょう。」云々と説く。

(evaṃ padmādhībhis tulyā nava rāgādayo malāḥ/
dhātor buddhādisādharmyaṃ svabhāvatrayasaṃgrahāt// (143)

trividhaṃ svabhāvam adhiḡṛtya cittavyavadānāhetos tathāgatagarbhasya navadhā buddhabimbādi-sādharmyaṃ anugantavyam/ trividhaḥ

⁵ See Zimmermann [2000: 215-216].

svabhāvaḥ katamaḥ/

svabhāvo dharmakāyo 'sya tathatā gotram ity api/
tribhir ekena sa jñeyaḥ pañcabhiś ca nidarśanañ// (144)

tribhir buddhabimbamadhusāradr̥ṣṭāntair dharmakāyasvabhāvaḥ sa
dhātuḥ avagantavyaḥ/ ekena suvarṇadr̥ṣṭāntena tathatāsvabhāvaḥ/ pañ-
cabhir nidhitaruratnavīgrahacakravartikanakabimba-dr̥ṣṭāntais trividha-
buddhakāyotpattigotrāsvabhāva ity/

(1) tatra dharmakāyaḥ katamaḥ/
dharmakāyo dvidhā jñeyo dharmadhātuḥ sunirmalaḥ/
tanniṣyandaś ca gāmbhīryavaicitryanayadeśanā// (145)

dvidvidho buddhānāṃ dharmakāyo 'nugantavyaḥ/ suvisuddhaś ca
dharmadhātuḥ avikalpajñāna-gocaraviśayaḥ/ sa ca tathāgatānāṃ pratyāt-
mam adhiḡgamadharmam adhiḡkr̥tya veditavyaḥ/ tatprāpti-hetuś ca suvi-
śuddhadharmadhātuniṣyando yathāhvaineyikaṃ parasattveṣu vijñapti-
rabhavaḥ/ sa ca deśanādhamam adhiḡkr̥tya veditavyaḥ/ deśanā punar
dvidvidhā sūkṣmaudārikadharmavyavasthānanaya-bhedāt/ yad uta
gambhīrabodhisattvapīṭakadharmavyavasthānanayadeśanā ca para-
mārthasatyam adhiḡkr̥tya vicitrasūtrageyavyākaraṇagāthodāna-
nidānādivividhadharmavyavasthānanayadeśanā ca saṃvṛtisatyam adhiḡkr̥-
tya/

lokotaravāl loka 'sya dr̥ṣṭāntānupalabdhitāḥ/
dhātoḥ tathāgatenaiva sādṛṣyam upapāditaṃ// (146)
madhvekarasavat sūkṣmagambhīranayadeśanā/
nānāṇḍasāravaj jñeyā vicitranayadeśanā// (147)

ity evam ebhis tribhir buddhabimbamadhusāradr̥ṣṭāntais tathāgatadharmakāyena niravaśeṣa-sattvadhātuparispharaṇārtham adhikṛtya tathāgatasyeme garbhāḥ sarvasattvā iti paridīpitam/ na hi sa kaścit sattvaḥ sattvadhātau saṃvidyate yas tathāgatadharmakāyād bahir ākāśadhātor iva rūpam/ evaṃ hy āha/

yathāmbaram sarvagataṃ sadā matam
tathaiva tat sarvagataṃ sadā matam/
yathāmbaram rūpagateṣu sarvagaṃ
tathaiva tat sattvagaṇeṣu sarvagaṃ iti// (MSA, 9.15)

(2)

prakṛter avikāritvāt kalyāṇatvād viśuddhitāḥ/
hemamaṇḍalakaupamyam tathatāyām udāhṛtam// (148)

yac cittam aparyantakleśaduḥkhadharmānugatam api prakṛtiprabhāsarvatayā vikāraṃ na bhajate 'taḥ kalyāṇasvarṇavad ananyathābhāvārthena tathatety ucyate/ sā ca sarveṣām api mithyātvanīyatasamtānānām sattvānām prakṛtinirviśiṣṭā 'pi sarvāgantukamalaviśuddhim āgatā tathāgata iti saṃkhyām gacchati/ evam ekena suvarṇadr̥ṣṭāntena tathatāvyaatibhedārtham adhikṛtya tathāgatatahataiṣām³ garbhaḥ sarvasattvānām iti paridīpitam/ cittaparakṛtīviśuddhyadvaya-dharmatām upādāya yathoktaṃ bhagavatā/

tatra māñjuśrīḥ tathāgata ātmopādānamūlaparijñātāvī/ ātmaviśuddhyā sarvasattvaviśuddhim anugataḥ/ yā cātmaviśuddhir yā ca sattvaviśuddhir advayaīśādvaidhikāretī/ (JĀ, pp. 64-65)

evaṃ hy āha/

sarveṣāṃ aviśiṣṭāpi tathatā śuddhim āgatā/
tathāgatatvaṃ tasmāc ca tadgarbhāḥ sarvadehina iti// (MSA 9.37)

(3)

gotraṃ tad dvididhaṃ jñeyaṃ nidhānaphalavr̥kṣavat/
anādīprakṛtisthaṃ ca samudānītam uttaram// (149)
buddhakāyatrayāvāptir asmād gotradvayān matā/
prathamāt prathamaḥ kāyo dvitīyād dvau tu paścimau// (150)
ratnavigrahavaj jñeyaḥ kāyaḥ svābhāvikaḥ śubhaḥ/
akṛtrimatvāt prakṛter guṇaratnāśrayatvataḥ// (151)
mahādharmaḥādirājatvāt sambhogaś cakraṇartivat/
pratibimbavabhāvātvanīrmaṇaṃ hemabimbavat// (152)

ity evaṃ ebhir avāśiṣṭaiḥ pañcabhir nidhitaruratnavigrahacakraṇartika-
nakabimbadr̥ṣṭāntais trividhabuddhakāyotpattigotrāsadbhāvārtham
adhikṛtya tathāgatadhātur eṣāṃ garbhaḥ sarvasattvānām iti paridīpitam/
trividhabuddhakāyaprabhāvitatvaṃ hi tathāgatatvaṃ/ atas tatprāptaye
hetus tathāgatadhātur iti/ hetvartho 'tra dhātvarthaḥ/ yata āha/

tatra ca sattve sattve tathāgatadhātur utpanno garbhagataḥ saṃvidy-
ate na ca te sattvā budhyanta iti/ (*Tathāgatagarbhasūtra*⁶⁾)
evaṃ cāha/

anādīkāliko dhātuḥ sarvadharmasamāśrayaḥ/
tasmin sati gatiḥ sarvā nirvāṇādhigamo 'pi ca// (*Mahāyānābhīdharmasūtra*)

tatra katham anādīkālikaḥ/ yat tathāgatagarbham evādhikṛtya bhagava-
tā pūrvakoṭīr na prajñāyata iti deśitam prajñaptam/
dhātur iti/ yad āha/

yo 'yaṃ bhagavaṃs tathāgatagarbho lokottaragarbhaḥ prakṛtipar-
iśuddhagarbha iti/ (ŚMDS)

sarvadharmasamāśraya iti/ yad āha/

tasmād bhagavaṃs tathāgatagarbho nīśraya ādhāraḥ pratiṣṭhā
saṃbaddhānām avinirbhāgānām amuktajñānānām asaṃskṛtānām dharmā-
nām/ asaṃbaddhānām api bhagavan vinirbhāgadharmaṇām muktajñānā-
nām saṃskṛtānām dharmānām nīśraya ādhāraḥ pratiṣṭhā tathāgatagar-
bham iti/ (ŚMDS)

tasmin sati gatiḥ sarveti/ yad āha/

sati bhagavaṃs tathāgagarbhe saṃsāra iti parikalpam asya vaca-
nāyeti/ (ŚMDS)

nirvāṇādhigamo 'pi ceti/ yad āha/

tathāgatagarbhaś ced bhagavan na syān na syād duḥkhe 'pi nirvinna
nirvaneccha prārthanā praṇidhir veti vistaraḥ/ (ŚMDS)) (RGV, pp.
69.15-73.8)

III 考察と結語

以上の I と II の内容を、ここでは簡潔に整理し、考察を加えたい。当該箇所は『如来蔵経』の宣言文、すなわち「すべての有情は如来蔵である」(sarvasattvās tathāgatagarbhāḥ) に対する『宝性論』の著者⁶による解釈を提示する。

先の I および II に見られるように、『宝性論』の著者は上記の宣言文を次のように解釈する。すなわち I では、

「要約すると、3種の意味で、常に「すべての有情は如来蔵である。」

と世尊は説かれたのである。すなわち、

(1) すべての有情に如来の法身 (tathāgata-dharmakāya) が遍満している
という意味で、

⁶ 『宝性論』の著者問題については、高崎 [1989: 389-397] 参照。

(2) 如来の真如 (tathāgata-tathatā) が無差別であるという意味で、および

(3) 如来の種姓 (tathāgata-gotra) が実在するという意味で、
 である。さらに、これら3種の意味の句についての解説は、のちに『如来蔵経』にしたがってなすであろう。」

と述べ、『如来蔵経』が語る「すべての有情は如来蔵である。」という宣言文は、世尊が法身、真如、種姓という3種の意味で説かれたものであるとして、詳細な説明をIIの箇所に委ねる。そのIIでは、当該の宣言文を、tathāgata-garbha (如来蔵) の複合語解釈を交えながら、3つの意味それぞれを詳説する。すなわち、法身、真如、種姓という3種の意味と複合語解釈を交えたその解説によれば、

- (1) 「如来の法身が、有情界 (sattvadhātu) に余すところなく遍満しているという意味に関して、「これらすべての有情は、如来の胎児である。」 (tathāgatasyeme garbhāḥ sarvasattvā iti) と [『如来蔵経』で] 説示されたのである。」
- (2) 「真如が無差別であるという意味に関して、「これらすべての有情は、如来の真如を血筋 [= 胎から胎児に継承される本質] としている。」 (tathāgatatahataiṣāṃ garbhāḥ sarvasattvānām iti) と [『如来蔵経』で] 説示されたのである。」
- (3) 「[自性身、受用身、変化身という] 三種の仏身を生じる種姓が実在するという意味に関して、「これらすべての有情は、如来の本性を血筋 [= 胎から胎児に継承される本質] としている。」 (tathāgatadhātur eṣāṃ garbhāḥ sarvasattvānām iti) と [『如来蔵経』で] 説示されたのである。」

という。

以上の考察から、次のような結論が導かれることになる。第1に、『宝性論』の著者は、「すべての有情は如来蔵である」(sarvasattvās tathāgatagarbhāḥ) という『如来蔵経』の宣言文を、すべての有情には、(1) 法身 (tathāgata-dharmakāya) が遍満している、(2) 如来の真如 (tathāgata-

tathatā) が無差別である、および (3) 如来の種姓 (tathāgata-gotra) が実在するという 3 種の意味で理解する⁷。

第 2 に、『宝性論』の著者は、先の宣言文内の複合語 tathāgata-garbha (如来蔵) の中の tathāgata (如来) を、(1) 如来の法身、(2) 如来の真如、(3) 如来の種姓 (あるいは本性 dhātu) をさすと解釈したうえで、(1) については、tathāgata-garbha を格限定複合語 (tatpuruṣa) と見なして、先の『如来蔵経』の宣言文 sarvasattvās tathāgatagarbhāḥ 「すべての有情は如来蔵である。」を、すべての有情は、如来の法身 (= 法身としての如来) の胎児 (garbha = [出生前の] 子) である、と解釈する。(2) (3) については、いずれも tathāgata-garbha を所有複合語と見て、すべての有情は、(2) 如来の真如を血筋 (garbha) とする、(3) 如来の種姓 (あるいは本性) を血筋とすると解釈する。複合語 tathāgata-garbha を、それぞれ-dharma-kāya-, -tathatā-, -gotra- という中間語 (madhyapada) が省略された熟語と見なす解釈ともいえるが、大乘仏教系の経論において如来蔵 (tathāgatagarbha) が説かれるの 3 つの代表的な文脈を示してもいる。

なお、『宝性論』の著者は、tathāgata-garba を所有複合語として解説する (2) (3) とは異なり、(1) のすべての有情に如来の法身が遍満するという意味に関してのみ、「これらすべての有情は、如来の法身を血筋とする」ではなく、「これらすべての有情は、如来の胎児である。」と、格限定複合語として説明する。この点は、「如来」を、法身としての如来に限定して、すべての有情はその胎児 (= [出生前の] 子) であるという説明がよりふさわしいとの解釈に立つといえようか。

第 3 に、したがって、「すべての有情は如来蔵である。(sarvasattvās

7 『宝性論』の著者はまた、II に見るように、これら 3 つの観点から、『如来蔵経』の 9 喩を意味づける。すなわち、「蓮華中に坐す仏の像」「衆蜂に囲まれた蜂蜜」「殻皮中の実」の 3 つの喩例が、すべての有情に (1) 法身が遍満することを喩え、同様に、「汚物に落ちた金塊」という 1 つの喩例が (2) 如来の真如が無差別であることを、また「貧家地中の宝蔵」「果実皮の中の種子」「弊衣中の宝像」「貧女胎中の王子」「泥模中の金像」の 5 つの喩例が (3) 如来の種姓が実在することを喩えたと意味づける。

tathāgatagarbhāḥ)」の一文そのものは、『宝性論』によるかぎり、(1) (2) (3) の3つの意味すべてを包摂する解釈が期待される。この点で、tathāgatagarbha 「すべての有情は如来の胎児である」(Tp) = 「すべての有情は如来の血筋 [胎から胎児に継承される本質⁸] をもつ」(Bv) のいずれも意味するところは実質的に等しく、『宝性論』の著者の tathāgatagarbha 理解はここにあると考えられる。

第4に、それゆえ、『如来蔵経』の「すべての有情は如来蔵である」(sarvasattvās tathāgatagarbhāḥ) の一文に対する「すべての有情は如来を内に宿している。」というような解釈 (*yeṣāṃ garbhe [sti] tathāgato te sarvasattvā iti)⁹は、本稿が検証した『宝性論』の理解 ((1): Tp, (2) (3): Bv) には一致しない。さらにまた、このような解釈は、9つの喩例をもって「すべての有情は如来性 = 仏性をもつ」「すべての有情に如来性 = 仏性がある」ことを主題とする『如来蔵経』に合致する解釈とも考えられない。この『如来蔵経』における「如来蔵」解釈をめぐる問題については別稿を期したい。

[略号]

D: sDe dge edition.

JĀ: *Jñānālokāṃkārā*. T. Kimura et al., ed., *Sarvabuddhaviṣayāvatāra-jñānālokāṃkārā nāma mahāyānasūtra*, 2004.

MSA: *Mahāyānasūtrāṃkārā*. S. Lévi ed., *Asaṅga, Mahāyāna-Sūtrāṃkārā*, Paris, 1907.

P: Peking edition.

RGV: *Ratnagotravibhāga*, See Johnston 1950.

ŚMDS: *Śrīmālādevīsīṃhanādasūtra*. P No. 760 (-48), D No. 92.

⁸ Cf. Tib. snying po (心髄、精華)。

⁹ 高崎 [1989: i]、Takasaki [2000: 76]、ツインマーマン [2014: 118-121, 137 (n.34)]。

[参考文献] (刊行年次順)

- Johnston, E. H. [1950]: *Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantraśāstra*, Patna: The Bihar Research Society.
- 中村瑞隆 [1961]: 『梵漢対照・究竟一乘宝性論研究』山喜房佛書林。
- Takasaki, J. [1966]: *A Study on the Ratnagotravibhāga (Uttaratantra) Being a Treatise on the Tathāgatagarbha Theory of Mahāyāna Buddhism*, Serie Orientale Roma XXXIII, Roma: Instituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- Seyfort-Ruegg, D. [1969]: *La Théorie du Tathāgatagarbha et du Gotra, Études sur la sotériologie et la Gnoséologie du Bouddhisme*, PEFEO 70, Paris: École Française d'Extrême-Orient.
- Schmithausen, L. [1971]: "Philologische Bemerkungen zum *Ratnagotravibhāga*", *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für Indische Philosophie* 15, pp. 123-177.
- 高崎直道 [1974]: 『如来蔵思想の形成』春秋社。
- 松本史朗 [1986]: 「如来蔵思想は仏教にあらず」『印度学仏教学研究』35-1, pp. 127-132.
- 原實 [1987]: 「Garbha 研究」『高崎直道博士還暦記念論集・インド学仏教学論集』春秋社, pp. 801-816.
- 松本史朗 [1989]: 『縁起と空—如来蔵思想批判』大蔵出版。
- 高崎直道 [1989]: 『宝性論』(インド古典叢書) 講談社。
- 袴谷憲昭 [1990]: 『本覚思想批判』大蔵出版
- 下田正弘 [1991]: 「『大乘涅槃経』と『宝積経・摩訶迦葉會』—佛塔信仰の否定—」『東方学』82, pp. 118-129.
- Hara, M. [1994]: "*Deva-garbha and Tathāgata-garbha.*" *The Buddhist Forum*, Vol. III, Papers in honour and appreciation of Professor David Seyfort Ruegg's contribution to Indological, Buddhist and Tibetan Studies, ed. by T. Skorupski and U. Pagel. London: School of Oriental and African Studies, University of London, pp. 37-55.
- 松本史朗 [1994]: 「蓮華蔵と如来蔵」『禅思想の批判的研究』大蔵出版,

pp. 411-543.

- 下田正弘 [1997]: 『涅槃經の研究—大乘經典の研究試論—』春秋社。
- Takasaki, J. [2000]: “The Tathāgatagarbha Theory Reconsidered: Reflections on Some Recent Issues in Japanese Buddhist Studies”, *Japanese Journal of Religious Studies* 27/1-2, pp. 73-83.
- Zimmermann, M. [2000]: “Brief Communication: Identification of a Quotation in the *Ratnagotra-vibhāgavṛtti*”, *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 1999* (Vol. 3), 2000, pp. 215-216.
- [2002]: *A Buddha Within: The Tathāgatagarbhasūtra The Earliest Exposition of the Buddha-Nature Teaching in India*, Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica VI, International Research Institute for Advanced Buddhology, Tokyo: Soka University.
- 下田正弘 [2014]: 「如来蔵・仏性思想のあらたな理解に向けて」『如来蔵と仏性』(シリーズ大乘仏教 8) 春秋社, pp. 3-95.
- ツインマーマン・ミヒヤエル [2014]: 「『如来蔵経』再考—仏性の九喩を中心として」『如来蔵と仏性』(シリーズ大乘仏教 8) 春秋社, pp. 97-139.
- 加納和雄 [2014]: 「『宝性論』の展開」『如来蔵と仏性』(シリーズ大乘仏教 8) 春秋社, pp. 205-247.
- Radich, M. [2015]: *The Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra and the Emergence of Tathāgatagarbha Doctrine*, Hamburg Buddhist Studies 5, Hamburg University Press.
- Jones, Chr. J. [2016]: “Beings, Non-Beings, and Buddhas: contrasting notions of *tathāgatagarbha* in the *Anūnatvāpūrṇatvanirdeśa* and **Mahābherīsūtra*”, *Journal of the Oxford Centre for Buddhist Studies* 10, pp. 53-84.
- 加納和雄 [2017]: 「*Tathāgatagarbhaḥ sarvasattvānām*—涅槃經における如来蔵の複合語解釈に関する試論—」*Critical Review for Buddhist Studies* (仏教学レビュー) 22, 金剛大学校, pp. 9-61.
- Jones, Chr. J. [forthcoming 2018]: “Selfhood and Mystery: *Tathāgatagarbha*

Doctrine in the *Mahāparinirvāṇamahāsūtra*", M. Blum & M. Shimoda (eds.), volume on the *Mahāparinirvāṇasūtra*, Hamburg University Press.

(平成 28-30 年度 科学研究費補助金・基盤研究 (A)「バウツダコーシャの新展開—仏教用語の日英基準訳語集の構築—」の研究成果の一部)

SUMMARY

On the Interpretation of *tathāgatagarbha*
in the *Ratnagoṭravibhāga*

SAITO Akira

The exploration of the semantics of the *tathāgatagarbha* compound has a long history in the modern research on Mahāyāna Buddhism. Despite a good number of studies dedicated to the topic, the question is unfortunately far from being solved.

The present paper revisits the meaning of *tathāgatagarbha* as interpreted in the *Ratnagoṭravibhāga* (RGV). The different interpretations of the *tathāgatagarbha* compound in the RGV make it a particularly valuable source in this respect. It was the *Tathāgatagarbhasūtra* which first declared that “all living beings are *tathāgatagarbhas*.” This *sūtra*, however, does not contain any analytic explanation of the compound. Instead, it clarifies the tenet by means of nine similes. In contrast, the RGV deals directly and in detail with *tathāgatagarbha* as the cause of the emergence of the Three Jewels. The focus of its interpretation is on the teaching that “all living beings are *tathāgatagarbhas*.” The word *tathāgatagarbha* in this statement is understood from three perspectives, i.e. (1) *dharmakāya*, (2) *tathatā*, and (3) *gotra*, and is interpreted as both a *tapuruṣa* compound [(1)] and a *bahuvrīhi* compound [(2), (3)].

According to this explanation encompassing three semantic dimensions, the RGV authors appear to have construed the word *tathāgatagarbha* as “embryo (*garbha*) of a *tathāgata*” or “having the genealogy (*garbha*) of a *tathāgata* within.” This interpretation underlies not only the RGV but also the above statement in the *Tathāgatagarbhasūtra* (“all living beings are embryos of a *tathāgata*” or “all living beings have the genealogy of a

tathāgata within”).

*Professor,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*